

劫餘詩存

松本芳翠著　書海社編輯部輯

松本芳翠先生著『劫餘詩存』と三浦野方先生著の『劫餘詩存掃帚錄』（書海誌 昭和三十六年十二月～昭和三十八年十二月掲載）を、詩ごとにまとめました。

『劫餘詩存』はできるだけ旧字を用いて原文通りに、『劫餘詩存掃帚錄』は現代仮名遣いに直して掲載しました。

また、書海誌には五十八頁までしか掲載されていませんので、それ以後の原詩は編集者が補填しました。

劫餘詩存掃帚錄

三浦勇次著

古人曰く「書は心画也」と、又曰く「文は人也」と。しかるに「心即ち人也」である。されば「画中詩有り、詩中画有り」との語も生ずる。私の受くる榜書からの感銘と榜詩からの感銘とは全く等しい。即ち「詩中書有り、書中詩有り」である。榜書された榜詩は、字字句句相乗積となつて無限に感銘が拡大される。

何人といえども詩情はあるのであって、これを吟詠するとき客観のできる詩となる。吟詠の方法として俳句あり短歌あり漢詩あり……千姿万態ありといえども、榜詩の場合漢詩が最も私に共鳴を起す。共鳴は原音の幾万分の一に過ぎぬであろうが、私には獅子吼と感ずる。

漢詩には一定の形式があつて、なかんずく、私の場合には平仄と韻の約束が第一番の難所である。それが榜詩の場合は、激湍となり、飛泉となつて絶大の効果を發揮する。

このようなことを言うといかにも、榜詩を百%分解しているようだが是は形式論であつて、詩そのものについては、鏡花水月、解つてているようで真如はとらえ難く、所詮、一盲の模索のみである。尾端を撫して象とは掃帚の如しに過ぎまい。

劫余詩存の縁起はその序文によつて知られる。これはまことに尊い。杜詩が詩史と云われているように、この縁起のゆえに編年体の劫余詩存はそのまま文化復興史である。

劫餘、確固として此に、詩存す。

觀妙、談玄、又、藝論

一として眞に非ざる莫し應に敬昵すべし。

至人の吟詠は乾坤を裏つつむ。

これは劫余詩存を通読したときの私の感想であつた。

閑人の行迹豈に存するを須いんや。

戰後の昏迷筆を呵して論ず。

翹望す和平と文化とを。

詩篇留め得て乾坤に托す。

これは同韻によつての榜詩の回示である。転句に詠ぜられた如く、和平と文化との翹望によつて貫かれたのが劫余詩存である。日夜朝暮に読誦して常に私は感銘を新たにする。これを書き留めて置いたならば、あるいは、これから漢詩に目を向けようとする人の参考の一助にもなろうかと思つた。しかし、それからといって解釈文と誤解されでは榜詩の迷惑となる。どこまでも一盲の撫象談である。掃帚錄と題した所以。

乙酉五月念四罹戰災避難途上作

紅顏負笈出家鄉。四十年華夢幾場。笑我本來無一物。劫餘贏得鬢邊霜。

同

食無魚介住無家。暮雨蕭蕭小巷斜。沽醉我將消

拂鬚。怕他酒陣作長蛇。

食に魚介なく住むに家なし。暮雨蕭々として小巷斜めなり。醉を沽うて我れ將に拂鬚を消せん

とす。怕る他の酒陣長蛇を作すを。

食するに魚介なく住むに家なし、當時兆民の窮状がこの一句に活写されている。酒に欲望を滅した私は、「ぞうすい食堂」の前、長蛇の陣中の一人であったことを思い出して、ぞつとする。

得家信

戰災兩度及身邊。襪被三旬七處遷。兒女傷痍何日癒。家書頻促賦歸田。

戰災兩度身辺に及び。襪被三旬七處に遷る。兒女傷痍何れの日にか癒えん。家書頻りに促がす帰田を賦せよと。

戰災に負傷された児女(現谷村夫人)の看病に一身を捧げられた父性愛の尊さ、帰郷を促す家信を、じつと耐へて、防空頭巾を冠り、一ヶ月の間に七ヶ所も移られた窮状、看病にゆとりが生じる程に傷痍が軽快されたときは『漢詩を勉強しましたよ』と承ったことがある。

壕居

一望誰知是帝都。灰塵何處認康衢。秋空偶挂下弦月。描出寒林枯木圖。

一望誰か知る是れ帝都。灰塵いづれの處にか康衢を認めん。秋空たまたま下弦の月を挂けて。描き出す寒林枯木の図。

全く、当時の帝都は武藏野の昔に返つたことであつた。立木が炭化して地上に黒々と立つていたが、スゴかつた。描き出す寒林枯木の図、ただでさえ弦月は不気味なものである。これらの枯木も、いつとはなしに、窮民の燃料として消えて行つたことである。

この作は壕舎の裏の野天風呂に浸つての作と承る。

颶風襲壕舎

烈風驅猛雨。日夜駭心魂。誰識壕居好。閒看屋漏痕。

烈風猛雨を駆つて。日夜心魂を駭かす。誰か識る壕居の好きを。間に看る屋漏痕。

焼残りや、強制疎開の木材によるひ弱い壕舎が台風に襲われたら、たまたまものではない。その中にあつて雨漏りの痕に筆意を捉らえて楽しまれた筆聖、顔真卿もかくやと。

八月旬五拜 大詔

一閃恵光灰廣洲。無端大戰此收矛。吁嗟臣罪以何贖。遂誤邦家千載籌。

一閃の恵光広洲を灰にし、端無く大戦ここに矛を收む。ああ臣が罪何を以てか贖わん。遂に誤る邦家千載のはかりごと。

一閃の怪光と千載の籌、首尾対象の妙、なげかれつとも詩人の吟詠…。

漫吟

笑我孜孜耕硯田。災餘屢乏杖頭錢。朝來細寫晉賢帖。又爲傷兒烹白餧。

笑う我れ孜々として硯田を耕す。災余しばしば乏し杖頭の錢。朝来細やかに写す晋賢の帖。又傷児の爲めに白餧(かゆ)を煮る。

杖頭の錢とは元来お小遣いのことである、多くは酒代。併しここでは令嬢のお米代である。芋を食すると米を食するとは、傷の癒りが目に見えて違うのである。米を入手されるのにどれ程苦心されたことか。当時、米は持ち運びさえ禁じられていた。乏しい時はお粥に煮られたことであらう。このように大切なお米代を杖頭の錢と興ぜらるるまた詩人の心。

歸省

³征人玉碎杳無還。路上胡兒行破顏。吾筆何堪蟹

行字。采薇欲老故鄉山。

征人玉碎杳として還るなし。路上の胡兒行く行く破顔。吾が筆何ぞ堪えん蟹行の字。采薇老いんと欲す故郷の山。

忠勇な兵は玉碎して遺骨さえ帰っては来ない。それなのに我が物顔に横行する洋鬼、横這いの字なんか見ても胸糞が悪い。ええ国に帰つてわらびでも采つて……私もそう思つたことであつた。

拌石兄罹災後。在熊本。遙見寄書。時余亦罹災。在壕舍。賦呈。

枯木殘灰繞敝廬。秋風兀坐得君書。墨林閒殺換鶩手。焦土一隅栽豆諸。

枯木殘灰敝廬を繞る。秋風兀坐君が書を得たり。墨林間殺す換鶩の手。焦土の一隅豆諸を栽す。了曰く君子もまた困ることがある。手に腹は代えられぬと。焼け土に豆や、諸を、植えられた。(生け垣も植木も屋根も南瓜葉に包まれたのが僕の家です)と當時私も知人に通知したことであつた。

失題

廟堂武弁誤經綸。上蔽皇明下賺民。九死得生贏此辱。忍看鴻業盡灰塵。

廟堂の武弁經綸を誤る。上は皇明を蔽い下は民を賺す。九死に生を得て此辱を贏つ。忍び看る鴻業尽く灰塵。

廟堂の武弁とは、委任された国家の武力を横領した軍閥である。眞の政治家を殺害して国家の目を潰し、國鈞を乱し、隣国を蹂躪して世界の憎しみを買い国を滅亡に導いた經緯を僅々二十八字で表現した詩史の一編。

乙酉秋晚。驥山老兄避戰禍在信州。寄書曰。頃者赴北越。欲得魚而不得。却獲酒矣。時余亦罹災。歸臥海南。偶舉網得魚。戲賦之。郵寄。

信北君藏三斗酒。海南我網細鱗鮮。多情最是天邊月。千里清光照兩筵。

⁴ 信北の君は藏す三斗の酒。海南の我は網す細鱗の鮮。多情最も是れ天辺の月。千里清光両筵を

照らす。

飲むに酒なく、食うに魚介なき秋、三斗を得たる酒仙、細鱗を得たる驕客、平昔ならば早速に相引いて終宵痛飲したことであらうに今は山河千里を隔てて、かなたは酒あれども肴なきを嘆じ、こなたは肴あれども酒なし、この良夜を如何せんと嘆じたことであらう。只天辺の月のみは千里の清光を送つて海南と信北との両つの筵を一時に照らす。その感懷やいかにと月に向うて見たいことであつた。

途上邂逅舊友

相逢何久闊。鬢髮映霜林。俚語童時調。仍存竹馬心。

相逢う何ぞ久闊。鬢髮霜林に映ず。俚語童時の調あり。なお存す竹馬の心。

もののさびしい旅先でひよっこり逢つた老友、お国なまりで話すうち、いつしか互に童顔に返つていた。
(皆さんも同窓会でそうでしょう。)

歸臥雜詩

客寓江都四十秋。歸來夢落古并州。風光有似年

前否。綾瀨蒲帆墨水鷗。

客寓江都四十秋。帰來夢は落つ古并州。風光年前に似たる有りや否や。綾瀬の蒲帆、墨水の鷗。

ほんとの故郷に帰臥してみると、四十年も住んだ第二の故郷の東京が却つてほんとの故郷に思えて、綾瀬、墨田を夢に見ると懐かしむ詩人。唐の賈島もそうであつた。

得意離家失意歸。江山歛迹欲忘機。弟兄一夜談何事。明日同登舊釣磯。

得意家を離れ失意にして帰る。江山迹を歛めて機を忘れんと欲す。弟兄一夜何事をか談る。明日同じく登る旧釣磯。

併し、一石、一木、昔ながらの故郷、「あすこは昔よく釣れたね」「兄さんあしたは、釣りに行こう」。

曲浦停舟問小童。童言客覓是家翁。平明蓑笠擔竿去。只在煙波縹渺中。

曲浦舟を停めて小童に問う。童は言う客の覗むるは是れ家翁。平明蓑笠、竿を担つて去る。只在らん煙波縹渺の中。

「おい坊や、〇〇さんという人を知らないかね」「それは家のおじいちゃんだよ、おじいちゃんは今朝早く釣りにいった。サア……どっちへ行つたかな」。

賈島の隠者を尋ねて遇はざるの詩とまた別の趣を見る。

漁郎在昔跨龜歸。今我無心坐釣磯。玉筈不開頭
已白。鄉村半是主人非。

漁郎在昔龜に跨つて帰る。今我れ無心釣磯に坐す。玉筈開かず頭已に白く。鄉村半ば是れ主人
非なり。

四十年振りの故郷には、もう知つた人も少なく、玉手箱は開かないのに白髪になつて帰つて來た、今浦
島のさびしい心。ちなみにこの結句は白詩の商山路有感の結句を援用された由を承つた。

幾遇戰災霜髮新。半生勞作付灰塵。遣愁唯有
枝筆。不歎江湖淪落人。

幾たびか戰災に遇つて霜髮新たなり。半生の勞作灰塵に帰す。遣愁唯有り一枝の筆。歎ぜず江
湖淪落の人。

戰災の労苦も、勞作の滅失の憂愁さえも、この一本の筆さえあれば消すことができるという筆聖の確信。
先代梅若万三郎名人はこの扇一本あれば愁うることはないといったとか、鶴澤清六は戰災のとき三味線の
撥だけを持って避難したとか。達人の愛用品には血が通つていると信ぜらるる。

興來驅筆倦圍棋。無復戰塵侵硯池。劫後文房餘
四寶。換鷺何必學羲之。

興來つて筆を驅り、倦めば棋を圍む。復た戰塵の硯池を侵す無し、劫後文房四宝を余す。換鷺
何ぞ必ずしも羲之を学ばん。

この一連は終戦数ヶ月後の作、世情も大部平静を取り戻し、筆聖を筆聖として尊敬するようになり、文
房用品入手の労苦が段々無くなつたことが察せらるる。

無復騷人驚寓居。有時風雨阻樵漁。閑裁退筆作
羅字。縷縷紫煙成篆書。

復た騷人の寓居を驚かす無し。時有りて風雨樵漁を阻む。閑に退筆を裁して羅字と作せば。縷
縷紫煙篆書を成す。

晴耕雨読、古筆の軸で羅字を作られたら輪に吹く煙が篆書に見えたという、書聖の閑日月、その頃煙草
乏しく、キセルで細く長く吸い延ばされたこと。また詩史である。

屋壁漏痕錐畫沙。臨池妙悟似禪家。森羅萬象皆
師友。閒詠風雲雪月花。

⁶ 屋壁の漏痕、錐画沙。臨池妙悟禪家に似たり。森羅萬象皆師友。間に詠ぜん風雲雪月花。

古人の書訣に「屋漏痕」だとか「錐画沙」だとかいうことがある。書道の悟りである。これらの言葉はまるで禅問答のようだが、思うにそればかりではあるまい。森羅萬象何一つとして師友ならざるはない。だから閑を見ては風、雲、雪、月、花、を詠じて道の養いとしたいもの。

丙戌新年口占

國破家亡春不春。泣寒泣餓劫餘民。能收亂局濟時者。一億萬中無一人。

國破れ家亡びて春も春ならず。寒に泣き餓に泣く劫余の民。能く乱局を収めて時を済う者。一億萬中一人無きか。

耐乏生活は終戦後虚脱を來し、衣無く食無く窮乏の苦痛は更に長く続いた。何の正月ぞ眞の政事家出でて時局を救えの感は一億の民が皆済しく抱いた念願であった。苛歛誅求、供出、皆苦痛を忍んだ。幸にして、今日、池田大臣をして日本は世界の大国とまで言はしめるようになつたのは、人間万事塞翁の馬か。

丙戌元旦所感 昭和二十一年

將傾大厦孰能支。深省唯須護國基。負荷人行殘雪路。迎春梅傲歲寒姿。

將に傾かんとす大厦たれか能く支えん。深省唯須らく国基を護るべし。負荷人は行く残雪の路。迎春梅は傲る歲寒の姿。

國傾いては、強力といえども一人では、どうにもならん。一億の力で、幸に残つた礎の上に建て直しあしようではないか。梅さえも寒を凌いで雄々しく咲いていいるではないか。

故園竹 次陸游晨起韻

庭前一叢竹。家翁曾所栽。年年凌霜雪。歲歲添孫來。劫餘吾歸臥。迎春舉壽杯。鼎坐弟與兄。話舊顏同開。先師此講學。少時從父陪。茫茫四十歲。歲與人不回。故園今就荒。隔竹鳥聲哀。涉世棹濁浪。不如留翦菜。

竹雨曰。因竹發興。寫到團欒之樂。末幅語入感慨。淒惻無限。

⁷ 庭前一叢の竹。家翁曾て栽うる所。年々霜雪を凌ぎ。歲々孫を添えて来る。劫余吾れ帰臥し。

春を迎えて寿杯を挙ぐ。鼎坐弟と兄と。旧を話して顔同じく開く。先師此に学を講じ。少時父に従つて陪す。茫々四十歳。歳人とともに回らず、故園今や荒に就き。竹を隔てて鳥声哀し。世を涉つて濁浪に棹さんこと。留つて菜を翦るに如かず。

竹雨先生評して曰く「竹に因つて興を発し、写して団欒の楽しみに到る。末幅、語は感慨に入り淒愴限り無し」と。

雪晨奇景

古松偃蹇翠成層。一道寒泉遶石燈。深夜天公飛玉屑。白描山下獨歸僧。

古松偃蹇翠層を成す。一道の寒泉石燈を遶る。深夜天公玉屑を飛ばし。白描す山下獨歸の僧。古松が横さまに生えていて、その側の石段をめぐつて泉が流れている。夜に入つて雪が積つたため、それが帰山する一人の僧に見えたという幻想詩。

顧唐人眞蹟

羽衣舞罷失芳姿。曲遏行雲亦一時。唐代野僧曾弄筆。墨痕千載照書帷。

羽衣舞い罷んで芳姿を失し。曲行雲を遏するという程の妙なる音楽でも、舞う間、歌う間のもので、や惟を照らす。

どんな美しい舞姿でも、また行く雲を遏するという程の妙なる音楽でも、舞う間、歌う間のもので、やがてあとかたもなく消えてゆくのに、唐代の名さえさだかでない坊さんの筆蹟が千数百年後の今も猶墨痕あざやかに、書斎に仰がれている。諸君、夢にも筆をおろそかには運ぶまい。

淨瑠璃人形

土偶購來陳几前。一持院本一三絃。無聲却勝有聲曲。細說人情幽又玄。

土偶購い來つて几前に陳す。一は院本を持し一は三絃。無声却つて勝る有声の曲。細やかに人情を説いて幽又玄。

延領欹身欲語遲。一聲裂帛撥絃時。無心土偶嬌成態。多感人催雙涕洟。

領(くび)を延べ身を欹(そばだ)て語らんと欲する遲し。一声裂帛絃を撥う時。無心の土偶嬌成として態を成し。多感の人は催す双涕洟。

四国は淨瑠璃の本場である。この人形は多分郷土芸術品であろう。多感の詩人は淨瑠璃の語り手である、恐らく腹話術に依つて「……わしやなんぼうでもええきらぬ……」。この二首は白楽天の琵琶行につながりを持つてゐると思う。

郷家迎誕辰

故里偶迎生誕辰。且歡且戚憶雙親。我今五十又
加四。已過家君齡一春。

故里たまたま迎う生誕の辰。かつ歎びかつ戚(かなしみ)双親を憶う。我れ今五十又四を加え。己に家君に過ぐ齡一春。

五十四回の誕生日に迎えられ、御先考より一才を越された詩人の述懐。

假寓奈良帶解寺

南去平城一里餘。千年古刹許僑居。茂林脩竹
臨流處。暫避炎塵學坐漁。

南、平城を去る一里余。千年の古刹許に僑居す。茂林脩竹流に臨む處。暫らく炎塵を避けて坐漁を学ぶ。

淨域留蹤亦宿縁。漂流濁世絕葷羶。古都天地多
靈感。洗硯欲參文字禪。

淨域蹤を留むるも亦宿縁。濁世を漂流して葷羶を絶つ。古都の天地靈感多し。硯を洗つて參ぜんと欲す文字禪。

本尊おびとけ地蔵は安産のお守を授くる所とか、清和天皇以来の由緒あるこの名刹に足跡を留めるのも何かの宿縁。物資不足のためとはいへ、葷酒やもろもろのなまぐさを絶つて來たためか。それはともかく古都の天地は三筆三跡にもゆかりの地、硯を洗つて大に文字禪に參ぜられたことが想像される。知らず文字の安産を祈念されしや否や。

作書換宣紙

世情一擲付雲煙。澄慮欲參文字禪。只恨劫餘縑
素乏。塗鴉換得白鷺箋。

世情一擲雲煙に付す。澄慮參ぜんと欲す文字禪。只恨む劫余縑素の乏しきを。塗鴉換へ得たり白鷺箋。

9 南都は古來文房四宝に富むといわれてゐるが、戦後はそうもいかなかつたのであらうか。鳥を白鷺に換

えられたのは流石。

篠島紀游五首

喪亂多年未得閑。爲忘行樂在人間。問君拉我去
何處。滿棹清風碧一灣。

喪乱多年未だ閑を得ず。爲めに忘る行樂の人間に在りしを。問う君我を拉して何處にか去る。
満棹の清風碧一湾。

行楽が人間にあることを忘れられたも道理。當時お菓子さえも最早や生涯口にできまいと私などは思つ
ていた。

篠島島如螺海上浮。松沙映處伍閑鷗。浴潮時憩高
巖頂。斷續漁歌遠近舟。

篠島螺の如く海上に浮ぶ。松沙映する處閑鷗に伍す。潮に浴して時に憩う高巖の頂。断続の漁
歌遠近の舟。

が、流石に詩人、鷗に伍し、漁歌を聞く、斯くてこの一聯の吟詠を生まれた。

朱欄構在翠微巔。山海珍羞上綺筵。憂患十年無
此樂。酒中憶殺李青蓮。

朱欄構えて在り翠微の巔。山海の珍羞綺筵に上る。憂患十年此の樂無し。酒中憶殺す李青蓮。

李白は船に上らなかつたが、この酒中仙は船から更に翠微の巔に上られた。李白一斗詩百篇というから
詩の篇数から逆算して、五合の酒を召し上がつたと解釈してもよからう。

賓主盡歡相與橫。忽疑半夜迅雷轟。起推窓戶天
無影。月照牀頭室有聲。

賓主、歎を尽くして相与(とも)に横わる。忽ち疑う半夜迅雷轟くかと、起(た)つて窓戸を推せ
ば天に影無し、月は牀を照らして室に声有り。

皆さん解りますか、黄庭堅答へて曰く「爛醉臥に就く、鼻鼾雷の如し」と。

歸帆過處浪翻銀。雲樹烟靄入眼新。手剖章魚同
一盞。長風吹髮拂炎塵。

帰帆過ぐる処浪、銀を翻えす。雲樹煙靄、眼に入つて新。手に章魚を剖きて一盞同じゅうす。
長風髮を吹いて炎塵を払う。

締めくくりとしての貫録を示す第五首、読み至つて思わず朗吟してしまう。誰ですかタコで一パイやり
たいなんて。

題墨竹

清節高風推此君。四時情趣自超群。尤欣白雨一過後。燈下鉤簾看綠雲。

清節高風此の君を推す。四時情趣自ら超群。尤も欣ず白雨一過の後。灯下に簾を鉤して綠雲を見る。

この一首によつて、王徽之が竹を指して「何ぞ一日も此君無くして可ならん耶」といつたゆえんがうなづけるであらう。芳翠画伯の墨竹は清節高風そのものである。

寄驥山老兄 後首次見寄韻

劫餘天地感懷多。借問信山秋奈何。休患南都衣食乏。滿林錦繡滿田禾。

劫余の天地感懷多し。借問す信山秋いかん、患うるなれ南都衣食の乏しきを。滿林の錦繡、滿田の禾。

捨姨二字韻何悲。緬想騷人對月時。長樂寺邊瓢裏酒。和將雙淚濺苔碑。

姨を捨てるの二字、韻何ぞ悲しき。緬想す騷人月に対する時。長樂寺辺、瓢裏の酒。双涙に和し将(も)つて苔碑に濺ぐ。

姨捨ての碑に涙と共に酒を手向けられた驥山先生、その夜から、夜なよな、鐘がゴンと鳴るや、老女の來訪を受けるようになったことであらうか。

拜歡 光明皇后御書樂毅論

不論筆蹟屬何人。墨妙傳來希世珍。千載勅封今始闢。宛然得見右軍真。

筆蹟の何人に属するかを論ぜず、墨妙伝え来る希世の珍。千載の勅封今始めて闢(ひらく)。宛然見るを時たり右軍の真。

脫却範疇鋒更舒。署名何讓撫臨餘。入神筆正出纖手。俗眼誤爲鬚叟書。

¹¹範疇を脱却して鋒更に舒ぶ。署名何ぞ撫臨の余に譲らん。入神の筆は正に纖手に出ず。俗眼誤

つて鬚叟の書と為す。

自注。御書樂毅論。筆勢極雄強。且以卷末署名與本文較異。或疑。其筆致非女人筆。今拝歎眞跡。則知其爲妄說矣。

自注に曰く、御書樂毅論は筆勢極めて雄強、且つ卷末の署名、本文とやや異なるを以て或は疑う其筆致女人の筆に非ざるやを。今眞跡を拝觀して、則ちその妄說たるを知る矣。

竹雨曰。論斷截然。一決衆疑。君深于書法。精于鑒識。人應首肯其言也。竹雨先生評して曰く、論斷截然として衆疑を一決す。君、書法に深く、鑑識に精なり。人まさにその言を首肯すべしと。

丙戌秋晚自奈良至刈谷途上所見

黃波遠接碧雲連。秋滿蜻洲劫後天。徒手空拳案山子。鳥聲喧裏立禾田。

黃波遠く碧雲に接して連る。秋は満つ蜻洲劫後の天。徒手空拳の案山子。鳥声喧裏禾田に立つ。徒手空拳の案山子こそ兵器も砲弾も奪われた、敗戦の日本の姿ではなかつたか。それとも詩人のある時の自画像かも知れない。

丙戌歲晚

少歲塗鴉癖未除。字爲雲勢自噓噓。明朝五十更加五。還染冰箋成墨豬。

少歲塗鴉癖未だ除かず。字は雲勢を爲して自ら嘘々。明朝五十更に五を加う。還た冰箋を染めて墨豬を成す。

また冰箋を染めて墨豬を成す。衛夫人筆陣図に「多肉微骨の者、之を墨豬と謂う」とあるからといって墨豬を成す。

之を肉太にして骨なき文字と解してはならない、一夜明くれば亥の年である、墨書のいのしし。

丁亥新年 昭和二十一年

南都淨刹養眞來。人竹平安斗柄回。雪案迎春春獻瑞。兩三古帖一枝梅。

南都の淨刹真を養いて来る。人竹平安斗柄回る。雪案春を迎えて春瑞を獻ず。両三の古帖一枝の梅。

絶無空襲脅春正。鐵帽戎衣夢後情。羽子低飛追
翠袖。紙鳶高踏瞰蒼生。

絶えて空襲の春正をおびやかす無し。鐵帽戎衣夢後情。羽子低飛翠袖を追い。紙鳶高踏蒼生
を瞰(みおろ)す。

この、のどかな一首の中に、ついに見たことのない、國民服とはいえ鐵兜に洋服姿の当時の先生を想像
し得る。また詩史の功德である。

偶成

何人眞箇是英雄。凡聖等歡雙眼中。絶代豪華恍
如夢。醒來天地一歸空。

何人か眞箇是れ英雄。凡聖等しく観る双眠の中。絶代の豪華恍として夢の如し。醒め来つて天
地一に空に帰す。

一億を叱咤した英雄も一朝にして絞首台の露と消えた。まことに絶代の豪華恍として夢の如しである。

偶吟示諸生

妙言佳句寫來時。手把牀頭筆一枝。忙裏偷閑閑
適意。學書何患步遲遲。

妙言佳句写し来るの時。手に把る牀頭の筆一枝。忙裏閑を偷(ぬす)んで閑、意に適す。學書何
ぞ患えん歩の遅々たるを。

たえにしておもいにかなうことのは こころしづかにふでをとるべし

(妙にして思いに適う言の葉は心閑かに筆を把るべし。)

帶解寺窓竹

三尺玻璃十六方。當窓綠竹見殊光。四時無厭自
然畫。雨洗風篩還雪妝。

三尺の玻璃十六方。当窓の綠竹殊光を見る。四時厭く無し自然の画。雨洗風篩還た雪妝。

三尺の硝子戸十六枚、水晶の様に磨かれている、澄觀さるる書聖。書聖が竹か、竹が書聖か。

謝楨陵君見贈手獲鮭

北奥銀鱗味勝鱸。惠然一夜落寒厨。山重水複君家遠。醉舐吟毫興不孤。

北奥の銀鱗味鱸に勝る。惠然一夜寒厨に落つ。山重水複君家遠し。醉うて吟毫を舐(なめ)れば興孤ならず。

李白もこの鮭のためなちば剝中への道を北奥に向かたであらう。権陵先生獲物の意外に大きかつたことに二度びっくり。

偶感

運腕差如意。臨池四十年。雲煙供養足。何日得通仙。

運腕やゝ意の如し。臨池四十年。雲煙供養足りて。何れの日か仙に通ずるを得ん。
東壁列仙の班に招かれたのは、この十二年後(一九六〇)である。前後半世紀を超える雲煙供養、尊しとも尊し。

漂婦

寒流晨激雨耶非。少婦臨谿洗綵衣。戈熄三年夢難結。空勞纖手侍郎歸。

寒流あしたに激するは雨か非か。少婦谿に臨んで綵衣を洗う。戈熄んで三年夢結び難し。空しく纖手を労して郎の帰るを待つ。

この詩題は、漂母によつて着想された創造語の由であるがいかにも古典的な感じである。内容と共に坐漁による獲物とも言えるこの一篇。遮莫この詩と、李白の子夜吳歌を並べて見て、千二百年の距りが感ぜられるであらうか。人間は、戦争という惨禍をどうして、こうも引ききりなしに繰り返えさねばならないのだろうか。

時事漫吟

半時暗澹半時明。戰禍于今及短檠。懷騁當年空襲下。壕中滅燭坐殘更。

半時は暗澹半時は明。戦禍今において短檠に及ぶ。懷いは聘す当年空襲下。壕中燭を滅して殊更に坐す。

停電に次ぐに停電、當時、電気、瓦斯による生活さえも最早、日本人には不能ではないかと、悲観していたことを思い起す。併し敗戦の故に、物質面に於ける復興は、目覚ましく、戦前を遙かに凌ぐ程の豊さ

になつた。

休把巷談登舌端。劫餘世態使人寒。亂離今日傷心地。詩酒何時繼舊觀。

巷談を把つて舌端に登すなれ。劫余の世態人をして寒からしむ。乱離今日心地を傷らば。詩酒何れの時にか旧觀を継がん。

精神面に於ては、後遺症の悪化甚だしく、今尚、言うに忍びず、聞くに耐へない出来事が日々相繼いで起きている。

衣糧乗屋百無全。仍領吟花弄月權。憂國詞人風雅士。啓明文化著鞭先。

衣糧乗屋すべて全き無し。仍(な)お領す吟花弄月の權。憂國の詞人風雅の士。啓晚文化鞭を著くる先んぜよ。

衣、食、住、車、一つとして満足でなかつた當時、詩人は、そのままこれを詠いあげられて、この一聯の詩史となつた。

探梅

一二又三五。行人印屐痕。回看山驛路。踏雪到梅邨。

一二又三五。行人屐痕を印す。回看山駅の路、雪を踏んで梅邨に到る。

前首に所謂、吟花弄月の權の行使である。

讀詩窓十四年 次韻以道謝

劫火焚書所剩稀。一篇珠玉伴鄉歸。雨聰翦看無厭。携入春山忘采薇。

劫火書を焚いて剩(あま)す所稀なり。一篇の珠玉郷に伴うて帰る。雨聰燭を翦(き)つて看れども厭く無し。携えて春山に入つて采薇を忘る。

劫火、書を焚いて剩す所稀であったので、古本屋さえ目につけば、眼の色を変えて漁書したものである。漁書が遂に癖となり、古本屋巡礼をする内、樗龜、先生壯年の頃に書かれた青淵詩存、觀月集、南汎集等に奇觀することが出来た。詩人は一篇の珠玉を郷里に伴われ、雨天には燭前に厭くなく、晴天には山に入つてわらびを探ることさえ忘れて耽読するどうたわれた。本の名は詩窓十四年、古本店で巡り会いたいものである。

帶解寺早春

春入僧房暖尚輕。南簷曝背對新晴。竹深黃鳥啼無影。露重紅椿落有聲。

春は僧房に入つて暖尚お輕し。南簷背を曝して新晴に対す。竹深くして黃鳥啼けども影無し。露重くして紅椿落ちて声あり。

燃料乏しく、太陽熱を利用して日なたぼっこをしたことは、多くの人が経験されたことであろう。詩人の曝背は常人と、同日に論じてはならない。次に来る転結の見事な対句に目を留められたい。

丁亥一月洗神君來過。即次其所携缶盧題畫詩韻。

煮茗留賓雪後天。寒窓綠竹拂雲烟。清談不及塵煩事。品畫評書日似年。

茗を煮て賓を留む雪後の天。寒窓の綠竹雲烟を払う。清談及び塵煩の事。画を品し書を評して日年に似たり。

賓客所携の缶盧題画の詩を次韻されたとあるが、賓主の茶飲み話の模様を通じて、世の静謐の様までがうかがわれ、次韻とは思えない。

缶盧……篆刻の名手であり、且つ書画三絶といわれる清の吳昌碩。

芳野懷古

劫後來尋芳野春。梵鐘聲裡踏香塵。山櫻旭日猶餘在。唯缺烏巾緋鎧人。

劫後來り尋ぬ芳野の春。梵鐘声裏香塵を踏む。山櫻旭日猶余して在り。唯欠く烏巾緋鎧の人。

緋威の鎧をつけて太刀佩きて見ばやとぞ思ふ山桜花……落合直文

洗神君新獲缶盧厓鞠圖

四壁寒香霜氣加。秋光一半屬君家。天來巧想入神筆。妙絕缶翁厓鞠花。

缶翁奇筆繪幽香。詩畫與書俱老蒼。眼看壁頭厓

四壁寒香霜氣加わる。秋光一半君家に属す。天來の巧想入神の筆。妙絶缶翁厓鞠花。

鞠色。薰風五月覺秋霜。

竹雨日。缶翁畫格。俊異奇逸。人難爭勝。此作善稱甚妙。無一字不精切。缶翁の奇筆幽香を繪す。詩画書と俱に老蒼。眼のあたり見る壁頭厓鞠の色。薰風五月秋霜を覺ゆ。

印人として余りにも有名な吳昌碩の画は中年後に学び初められたとの由である。(吳昌碩印譜初集白紅社刊解説参照)吳讓之、趙之謙と共に詩书画三絶とうたわれて居るので、この厓鞠図をこの様に看ぜられたことがうなづける。厓鞠という字義が解り兼ねたので、お尋ねしたら「がけに咲いた菊でした。」と詩人は教えて下さった。大字典では「鞠、菊に通ず」とあり、字源では「鞠、かわらよもぎ」とある、かわらよもぎは菊科であっても花は目立たない。こここの鞠は或(あるいは)野菊のたぐいかも知れない。私は南国肥前の生れであるが、野菊の盛りには丘陵全体が黄金色に光り、香りに包まれてしまう程である。殊に厓にたれさがった野菊は想つただけで香つて来る様で竹雨先生がこの詩を評して「…一字として精切ならざるなし」と言われた意が解る。

丁亥五月赴于仙臺本宮兩地講習會

多歲江湖作勝遊。災餘自擬一閑鷗。酒逋書債猶難贖。載筆來過古奧州。

多歲江湖勝遊をなす。災余自ら擬す一閑鷗。酒逋書債猶贖い難く。筆を載せて來り過ぐ古奥州。

蔚勃として復興した書道熱は遂に書聖の出馬を乞うまでに昂まつて來た。作中ただ、転句の酒逋を飲み不足、書債を書く権利、と解したい。

酩泥雅筵席上率賦

三十年來把臂親。劫餘忽作異鄉人。尊前有淚君休怪。千里相逢萬感臻。示芳哉子

この酩泥はメーデーまつり五月一日であろうし、酒仙の集まり故泥の如く酩泥はふとの兼ねあいであらう。

尚泥はドロではなくて、デイというナマコに似た海の虫だと簡野道明先生は説いてある。三十年來臂を把つて親しむ。劫余忽ち異郷の人となる。尊前涙有り君怪しむながれ。千里棚逢いて万感いたる。

酒は涙か溜息か。

四皓下山來乘風。暫時遊息墨林中。欣君顏色猶依舊。白草原頭一點紅。呈佩玉女史

四皓山を下つて來て風に乗ず。暫時遊息す墨林の中。欣ず君が顏色猶旧に依るを。白草原頭一

比喩に依つて興を発する妙作。流石、竹堂、驥山とそして御自身の四老を商山の四皓にたとえ、白髪頭の草が生えているという。そこで佩玉女史を紅一点と仰せられた。

別腸宏豁似深淵。満酌對君誰泰然。觀會休嘆觥ごう小。獻酬終夜不須眠。呈流石兄

別腸宏豁深淵に似たり。満酌君に對して誰か泰然。歎会嘆ずるなかれ酒觥の小なるを。獻酬終夜眠るを須いず

満酌君に對して誰か泰然の誰かは実は詩人その人であつたろう。飲み明かそうと結句されたのがその裏づけである。

幾度酒場經戰功。堂堂引滿八仙雄。想君筆陣應逾健。萬丈遊絲收掌中。呈竹堂兄

幾度か酒場戰功を経て。堂堂満を引く八仙の雄。想うに君が筆陣まさに逾よ健やかなるべし。万丈の遊絲掌中に收む。

八仙の雄とは詩人昭和八年作函山八仙歌中の雄と解した。また万丈の遊絲とは仮名文字を指すのであるうか。

醉酒蘭亭祀普賢。驥翁何讓飲中仙。高談如舊不知老。下筆龍蛇驚四筵。呈驥山兄

酒を蘭亭に酌して普賢を祀(まつ)る。驥翁何ぞ飲中の仙に譲らん。高談旧の如く老を知らず。筆を下せば竜蛇四筵を驚かす。

驥山先生を飲中八仙、就中、張旭に比して興ぜられたもので驥翁の面目躍如。

書海再刊一周年

書海重航已一年。群鷺轉項舊因縁。墨花繚亂魁文化。遮莫狂瀾尚拍天。

書海重航已に一年。群鷺項を転ず旧因縁。墨花繚乱として文化に魁けず。さもあらばあれ狂瀾尚天を拍つは。

戦後、再刊して僅々一年、已にこの盛況、天を拍つ狂瀾を打ち越え打ち越え十三年にして財團法人を成すに到つた。

志筑中島氏見贈手製銘茶賦此道謝

古鼎松風手自前煎。筑山新茗洛陽泉。僧房清寂

無人到。投筆時參桑苧禪。

古鼎松風手自ら煎ず。筑山の新茗洛陽の泉。僧房清寂人の到る無し。筆を投じて時に參ず桑苧禪。

澄みきつたたずまいをテレビジョンでのぞくような一首である。茶というものは、どうして斯くまでに人の心を鎮めるのであらうか。先代萩の『かたへに飾る黒棚より、取り出す錦の袋物、風炉に架けたる茶飯釜の、湯の試みを千松に、飲ます茶碗も樂ならで、お末が業を信楽や、いつ水注しを炊ぎ桶、流す涙の水こぼし、心も滴き洗い米、釜に移して風炉の炭、直してあおぐ扇さえ……。

この上なくしんみり聽かれるのも、叙述に、所作に、遺つた茶道具の功徳であらう。松風の音を起す古い風炉釜に、京の水を煮て、筑波山の新茶をいれ、人無き方丈に、しばし筆を忘れた筆聖の寂然たる姿。桑苧禪：茶經三巻を撰して有名な唐の陸羽が桑苧翁と号するので、時々桑苧翁の禪に参するとしやれたものであらう

篆刻

幽齋揮鐵筆。朱白奪天工。大海掣鯨手。役來方寸中。

幽齋鐵筆を揮う。朱白天工を奪う。大海鯨を掣するの手。役し来る方寸の中。

篆刻彫虫の技といえども小細工を悔るかの如くであるが、一寸四方の中の小字と雖も天を衝き地を貫く勢が有るならば三丈の壁に書かれた大文字と異なることはない。その様な本当の篆刻を詠まれたこの作、兎角小刀の先でデッチアゲて奇を衒う向きのお護符(ふだ)にこの詩を写してさし上げたい。

南都寓目

鋤犁侵淨域。滿地只諸禾。鐘廢樓空在。南瓜繚似蘿。

鋤犁淨域を侵す。満地只諸禾。鐘廢して樓空しく在り。南瓜繚うて蘿に似たり。

終戦二年、糧食愈々乏しく、人民は殆んど俄百姓になつた。自裁自食。供出に因る鐘の無い鐘樓に南瓜が這いかぶさつた寺院の多い古都の情景、悽蒼である。

訪竹堂于富士山麓而不遇

雲低岳麓柳毵毵。燕子飛過何氏庵。村驛蕭條君不見。一簑烟雨向湘南。

雲は岳麓に低れて柳毵毵(さんさん)。燕子飛んで過ぐ何氏の庵。村驛蕭条として君見えず。一簑の烟雨湘南に向う。

不自由な乗物も親友に遇う楽しみの前には苦にならなかつたが、遇はずに帰れば又千里、一簍の姻雨湘南に向う。鄭谷の、「君は瀟湘に向い我は秦に向う。」とは亦別種のペース。

丁亥八月邂逅如流書伯于松里山人邸

臨騎曾共品鷺群。劫後瓢零一片雲。偶爾流過衣
浦畔。墨華薰處忽看君。

臨池曾て共に鷺群を品す。劫後瓢零一片の雲。偶爾流れ過ぐ衣浦の畔。墨華薰する處忽ち君を見る。

前詩と打つて変わつて、是は又偶然邂逅のうれしさ、あれは駿州岳麓、これは尾州衣が浦雲水の流るるが如き行脚、結句まことに適切如流先生名は郁。

偶作

食無魚介出無車。彈鋏高歌又歎嗟。履正則窮
歪則達。何慙劫後未成家。

食に魚介無く出づるに筆無し。鋏を弾いて高歌又歎嗟。正を履めば則ち窮し歪なれば達す。何ぞ懸じん劫後未だ家を成さざるを。

この機会に故事を学ぼう。史記孟嘗君伝に「馮驩、孟嘗君の客(食客)を好むと聞きて之に見ゆ。孟嘗君を伝舍に置く。驩その劍(鋏)を弾じて歌いて曰く。長鋏帰來乎、食に魚無しと。孟嘗君之を幸舍に遷す。食に魚あり。復た劍を弾じて歌いて曰く、長鋏帰來乎、出るに輿無しと。孟嘗君之を代舍に遷す。出入に輿車あり。又劍を弾じて歌いて曰く、長鋏帰來乎。以て家を為す無しと。云々」

この故事を知つてこの作を鑑賞すると興趣格別と信ずる。字引では弾鋏||「主人を諷して祿位を求む」とある。詳しく知ろうとする人は中国故事物語(河出書房新社刊)の「長鋏帰來(かえ)らんか」の項を見らるるよい。

鷺

白鷺爲群何處歸。一行遠映碧天飛。山中自有水
明地。莫向泥沙汚雪衣。

竹雨曰 寄興深微。不墮詠物熟路。

白鷺群を爲して何れの處にか帰る。一行遠く碧天に映じて飛ぶ。山中自ら水明の地有らん。泥沙に向つて雪衣を汚すなけれ。

おおい、前衛に行くんじやないぞ。正道につけ、正道に。この解釈如何。

戯言博粲

作詩不若耨田疇。文筆難爲升斗謀。歸去故山無尺地。自嗤家法倣南州。

詩を作るは田疇に耨(くさぎ)るに若(し)かず。文筆為し難し升斗の謀。故山に帰り去つて尺地無し。自ら嗤(わら)う家法南洲に倣(なら)いしを。

詩を作るより田を作れと言いならわされている通り、その頃文筆では生計がたたなかつたので、故山に帰つたが、作ろうにも田畠がない。それは家憲として西郷さんの遺法を用いたからだ、との詩人のざれごと。南洲翁の詩に「幾たびか辛酸を歴て志始めて堅し。丈夫玉碎瓢全を恥づ。我家の遺法人知るや否や。児孫の為めに美田を買はず」とある。

詠史

趙高捕鹿獻君王。呼馬呼麋亦未妨。只恐人間心類獸。大秦丞相是豺狼。

趙高、鹿を捕へて君主に獻ず。馬と呼び麋と呼ぶも亦未だ妨げず。只恐る人間の心獸に類する。大秦の丞相は是れ豺狼。

秦の天下を横領しようとした、秦の丞相趙高は、鹿を馬と言い張つて君王に獻じた。その言に従つた臣下を味方につけ、反対した者を殺して謀反を遂げた。ここまでが故事で、詩人はこう仰しやる。鹿を指して馬といつたってそれは大したことではない。只恐れるのは人間の心が獸に類することだ。趙高は人間面をしていても山犬や狼と同じではないかと。麋は鹿の一種、鹿は仄字で平灰が合わぬために平字の麋が用いられた。

尚、謀られた君王胡亥は馬も鹿もけじめのつかない暗愚故、馬鹿(ばろく)といわれた。これがバカの初まりという説がある。

帶解寺偶吟

地偏無俗累。境靜有泉聲。竹影描窓搖。香煙題壁縈。

地偏にして俗累なく。境静かにして泉声あり。竹影窓に描いて搖(ゆ)れ。香煙壁に題して縈(めぐる。)

おびとけ寺の素描、全対格を以て画然。偶吟……偶吟に同じ。

題畫

孤松幽澗底。老幹拂雲端。半夜濤聲起。曉天嵐氣寒。

孤松幽澗の底。老幹雲端を払う。半夜濤声起り。曉天嵐氣寒し。（寒韻 端、寒）
是を私は次の通り読んで全対格と見たい。

孤松、澗底に、幽(しづか)に、
老幹、雲端を、払う。

半夜、濤声起り、

曉天、嵐氣寒し。

濤声……この場合松籟の事で波音ではない。

丁亥九月關東大洪水

刀江氾濫決階隄流。濁浪將吞關八州。昨苦旱乾今惱水。敗殘家國那多憂。

刀江氾濫、隄を決して流る。濁浪將に呑まんとす關八州。昨旱乾に苦しみ今水に惱む。敗殘の家國那んぞ憂多き。（无嗣、流、州、憂）

刀江、即ち利根川の洪水を嘆かれた詩史、当時の国情は真に慘憺たるものであった。

濫伐山林不省災。一朝騎虎勢難回。如今旱潦禍相接。似警人間猪口才。

山林を濫伐して炎を省みず。一朝騎虎勢い回し難し。如今旱潦、禍相接す。警むるに似たり人間猪口の才。（灰韻、災、回、才）

山榮えれば國榮え、山衰ゆれば國衰ゆるとは古來の言い伝えである。又江を治むる者は國を治むとも言はれる。猪口才の濫伐、仁者をして山を哀しましめ、旱潦相次で禍を招き知者をして水を哀しませたのであつた。

臨池雜興

書法千年何所宗。興來揮灑豁心胸。吳牋歎雪寒光淨。徽墨飄香瑞色濃。筆底風生蹲猛虎。硯池雲起躍潛龍。塗鴉畢竟吾娛我。未必追隨先哲蹤。

竹雨曰 中幅二聯。詠出紙墨筆硯。首尾語意相應。別有會心。可謂完整

之作。

書法千年何の宗とする所ぞ。興来つて揮灑すれば心胸豁し。呉牋雪を欺いて寒光淨く。徽墨香を飄して瑞色濃やかなり。筆底風生じて猛虎蹲まり。硯池雲起つて潛龍躍る。塗鴉畢竟吾れ我を娯しむ。未だ必ずしも先哲の蹤に追随せず。 (冬韻)

宗 || ほんもと

吳牋 || 吳、即ち中国江蘇省産の紙

徽墨 || 中國徽州府產の墨

塗罪ムカシ——ぐるぐる塗るムカシ 明セムカシ

蹤 || あしあと

卷之三

書法千年何所宗。
興來揮灑豁心胸。
↓起聯

○ ○ ● ● ○ ○ ● △

吳昌碩畫於濟南
徐熙
香玉
色潤
告別

筆底風生○尊孟先生○覘他雲記○瞿替娘○

塗鴉畢竟吾娛我。
未必追隨先哲蹤。

平灰の約束】第一句の第一字が灰字である。

「平仄の約束」第一句の第一字が仄字であるときはその平仄式を仄起式という。この詩は仄起式である。第二字が仄ならば第四字は平でなければならない。これを二四不同という。第一字が仄ならば第六字も仄でなければならない。これを二六对二、う。

第一句の第一字が仄ならば第一句の第一字は平でなければならない。そして一四不同一六封の規定によ

第三句の平仄は第二句と同じく、第四句の平仄は第一句と同じになる。これは丁度、第一句と第三句と

六四 二三四三の間二の三の三の所用があるべし。占。二三を繩。三を正す。

〔韻の約束〕 第一
・二
・四
・六
・八の各句は韻をふまねばならない。この詩の場合には上平声冬韻である。

ばならない。この点は平仄の約束中、左右対照を破ることになる。

と向々字々頃既念が相対してみられてゐる。

を詠出し、首尾(起尾両聯)は語意相応す。完整の作と謂う可し」と。

この詩を自書 使用中の扇子を某大家が手に取つて見られ
見識ですねと感嘆せられた由さもそうず、さもありなん。
末句「未必追隨先哲蹤」に至つて 大した

尚、序でながら、絶句というのは律詩が半分に絶たれた形の詩で、例えばこの詩の初めの四句を探ると、仄起式後対格の七言絶句を成し、後半の四句を探ると仄起式前対格の七言絶句、また三・四・五・六の四句を探ると、これは平起式全対格の七言絶句を成すのである。尚又、よく整つた律詩になると、一・二・七・八の四句を探つても一首の七言絶句として見られる場合もあるのである。

釣蟹

丁亥十月初五與澄心會同人釣蟹於衣浦此日收獲甚少矣

東海書人偶擲毫。扁舟載酒釣沙蟇。無腸公子斂戈北。不似橫行波底豪。

丁亥十月初五澄心會同人とともに蟹を衣浦に釣る。此の日收穫甚だ小なり。

東海の書人偶ま毫を擲うち。扁舟酒を載せて沙蟇を釣る。無腸の公子戈を斂めて北ぐ。似ず横行波底の豪。(豪韻、毫、蜜、豪)

沙蟇||カニのこと。無腸の公子もカニの異名である。

北||敗北の北で、逃げること。

戈をおさめて逃げるとは、常に波底を横行する豪のものにも似合わしからぬとの御託宣であるが、この一戦果して勝ち戦であったか、それとも負け惜しみか。副題には、この日收穫甚だ少しあとある。

訪栗野君於銀街

訪到繁華熱鬧街。掩窓忽是一閑齋。孤燈對酌肝相照。吐盡胸中萬斛懷。

訪て到る繁華熱鬧の街。窓を掩べば忽ち是れ一閑齋。(佳韻、衛、齋、懷)

萬斛の懷。(佳韻、衛、齋、懷)

熱鬧||混雜すること、さわがしきこと。

戦災後別れ別れになつていていたが、たまたま上京、久し振りに銀座に栗野氏をたづねられた時の作。栗野氏も非常に喜んで店を早仕舞して板戸を下ろし、街の雜踏を遮断して、一灯の下に對坐、酒を酌み交しながら肝膽相照らして積る懷いを吐きつくされた。錄音がないので話の内容は知る由もないが、師弟の情のこまやかさが、しみじみと美しく感ぜられる作である。

題自畫竹

或爲扶老杖。又作釣魚竿。競向人間去。孤高節獨安。

或は老を扶くるの杖となり。又釣魚の竿となり。競いて人間に向つて去る。孤高、節ひとり安し。(寒韻、竿、亥)

詩人は水墨画の名手。殊に、琅玕無限の色彩を黑白によつての表現甚妙。に拘わらず、曾て誌上に發表されたことを知らない。孤高節独り安んぜらるるなるべし。

秋晚囁目

黃波萬頃刈禾闌。人散西疇暮靄殘。利刃一鎌誰放却。初三纖月挂林端。

（黄波高頃刈禾闌なり。人散じて西疇暮靄残す。利刃一鎌誰か放却す。初三の纖月林端に挂く寒韻、闌、残、端）

この様な発送は、とかく日本人好み、いわゆる和臭として難じられそうな情景である。併しこの考えが和、唐共通であることは、韓愈の詩に「晴雲如擘絮、新月似磨鎌」と有ることによつても知られる。

戊子一月念九第五十六誕辰偶聞外孫出生記喜 昭和二十三年

七八誕辰寧樂迎。飛書朝報外孫生。誰將趙璧比兒子。不換大秦三五城。

七八の誕辰寧樂に迎う。飛書あしたに報ず外孫の生るるを。誰か趙璧を以て兒子に比す。換えず大秦の三五城。（庚韻、迎、生、城）

しきがねもくがねもたまもなにせむにまされるたからにしかめやも

山上憶良

偶成

暴虎憑河客氣灰。壯心依舊尚崔嵬。平生涉獵千年史。靜閱古今成敗來。

（暴虎憑河客氣霜灰す。壯心旧に依つて尚崔嵬。平生涉獵す千年の史。静かに古今の成敗を閲して来る。灰韻、灰、嵬、來）

こうして清澄高雅な書格がひらかれて、円熟沈潜した筆致が示現されて來たと信ずる。

訪舊友砂洲君于立田村四首

雲樹煙邨野水涯。墨香飄處是君家。因懷夏曉風生座。十里平田盡藕花。

（雲樹煙邨野水の涯。墨香飄る處是れ君家。因つて懷う夏曉風座に生ずるを。十里平田尽く藕花。（麻穢、涯、家、花）

驅使龍蛇競筆端。墨池硯海幾波瀾。卅年一過餘豪在。舊誌與君燈下看。

(寒韻、端、瀾、看)
龍蛇を駆使して筆端に競わしむ。墨池硯海幾波瀾。卅年一過余豪在り。旧誌君と灯下に看る。

岐蘇分水野田間。夕照映波柔櫓閑。曾訪蘭亭僦舟去。篷窓復看畫眉山。

岐蘇水を分つ野田の間、夕照波に映じて柔櫓閑なり。曾て蘭亭を訪れ舟を僦いて去る。篷窓復た見る画眉の山。(刪韻、間、閑、山)

相逢悵酌別離卮。得意人間之能幾時。千里江山路長在。加餐歲歲報花期。

相逢うて悵として酌む別離の卮。得意人間能く幾時ぞ。千里江山、路長へに在り。加餐歲々花期を報ぜよ。(支韻、卮、時、期)

竹雨曰 清空如話。筆端不窘。而有許多風味。非老手不能。

第一首で旧友の居所の情景を、第二首では昔語りを、第三首では近郊探勝、第四首では別れの盃。瞭然眼に見る如く、時の経過と共に哀愁を感じされる。されば、竹雨先生も評して「清空話するが如く筆端窘らず。而も許多の風味有り、老手に非されば能わず」と。

尚、昭和三十五年詩人の日展作品であった高啓の「渡水復渡水。看花還看花。春風江上路。不覺到君家」中の「春」を「薰」に置き替えると、第一首の情景になるであろう。

將去南都而移居於東都

閑寺隨緣暫避喧。復移萍迹向萍迹。南簷杏樹北窓竹。歲歲無渝添子孫。

閑寺縁に随つて暫く喧を避く。復た萍迹を移して萍迹に向う。南簷の杏樹北窓の竹。歲々渝る無く子孫を添えよ。(元韻、喧、煩、孫)

假寓とはいえ足かけ三年、惜別対照のシンボルとして杏と竹と。読者をしてホロリとさせる。連想されるのは、白楽天の「別種東坡花樹」曰く「花林好住して顛願することなけれ春至らばた但知る日に依りて春なるを」と、これは少し消極的である。吾が詩人は「杏よ子、(み)を実らせよ、竹よ孫(たけのこ)をふやせよ。」と積極的である。